

日中文化振興事業団が日本の友好市民を連れて咸寧を訪問し、三国文化を探訪

10月13日から15日にかけて、日中文化振興事業団が日本の友好市民代表団17名を連れて、我が市にて友好訪問を行いました。

代表団は赤壁古戦場、潜山国家森林公园の竹博物館と桂花博物館、湖北科技学院鄂南文化展示館、桂花源景区、黄鹤楼森林美酒タウンを訪問し、現地調査と座談会を通じて咸寧の風土と人情を理解し、三国文化を探訪しました。

写真は、代表団が赤壁の摩崖石刻前で記念写真を撮った様子です。

写真は、代表団が潜山国家森林公园桂花博物館で記念写真を撮った様子です。

三国志の物語は、17世紀からアジアで広く伝わり、日本では小説、漫画、人形劇、ゲームなど多様な形で発展してきました。今日に至るまで、三国志の物語は日本では誰もが知るものとなり、多くの「三国ファン」が生まれました。今回咸寧を訪れた日本の訪問団には、企業家、学者、大学生などが参加しており、彼らには共通の趣味があります。それは三国文化です。

写真は、代表団が湖北科技学院鄂南文化展示館を見学している様子です。

湖北科技学院の教授で、鄂南文化研究センターの主任である何岳球さんが、代表団に鄂南文化と無形文化遺産について紹介し、代表団と三国文化をテーマに座談交流を行いました。特に、魯肅とその子孫と咸寧嘉魚県との関係について詳しく説明しました。

「私は三国文化が大好きで、なぜ魯肅の墓が彼の故郷にないのか非常に疑問に思っていました。今回咸寧を訪れ、皆さんの説明を通じてその理由を理解できたことが、この訪問で最も大きな収穫でした」と、代表団の団長である日中文化振興事業団の監事、井上一さんは座談会で感激して話しました。

写真は、代表団が湖北科技学院鄂南文化展示館で三国文化テーマの座談交流を行っている様子です。

写真は、代表団のメンバーが次々とメッセージ帳にメッセージを残している様子です。「三国文化が日本に伝わる」「千里の波濤を越えて咸寧市に至る。三国文化を学び、感謝の意を表します」「日中友好文化交流の大義」「中国古典文学が素晴らしい」などのメッセージが書

かれました。

日中文化振興事業団は、日中友好交流を促進し、両国の友好関係を維持することを目的に設立された日本の団体です。この機関は日中文化交流を中心とし、広範な人材交流や学習会、講座、交流活動、音楽会などの日中友好交流プロジェクトを展開しています。

写真は、代表団が桂花园景区を見学し、咸寧の嫦娥と桂花文化についてさらに理解を深めている様子です。

写真は、代表団が黄鶴楼酒業を見学し、中国の白酒文化について学び、白酒のブレンドを体験し、自作の白酒を試飲している様子です。

日中文化振興事業団の代表理事である胡金定さんは、「日本人は中国の伝統文化に非常に興味を持っており、特に三国文化は日本人の血となり肉となっています。今回の咸寧への訪問を通じて、赤壁で三国文化を探訪し、日本の民衆が中国の歴史と文化、現代中国の発展をより理解できるようにし、両国の交流を深め、友好関係を強化したいと考えています」と話しました。

出典：開放咸寧